

地域コミュニティと近所づきあいの現状

宮木 由貴子

<住宅選択の条件の変化>

一般に住宅の選択にあたっては、間取りやデザイン、設備、構造や耐震性・耐久性、といった家そのものと、駅やスーパー、各種施設の近さや利便性などといった家の場所や立地に加え、騒音や振動、緑地や空気、日当たりなどの周辺環境が重要視される。近年、この周辺環境の一部に「人」が加味されるケースが目立っている。その背景には、夫婦共働き世帯の増加、親の不在や塾通いによる子どもの一人歩き、老夫婦世帯や単身世帯の増加などがあり、気を許せる人の近くに住み、いざというときには助け合いたいというそれぞれの思惑がある。例えば、既婚の娘の家族と娘の親世帯が近居するケースも増えているが、これも遠慮なく相互扶助ができるメリットが大きい。また、居住予定者が組合を作ってゼロから集合住宅を設計・建築していくコーポラティブハウスや、リビングやダイニングなど生活の一部を共有するコレクティブハウス、家そのものを共有するシェアハウスなども注目されており、他人と暮らしの一部を共有する「長屋」的コミュニティが見直されている。

庭付き戸建マイホームが一元的な夢とされた時代から、自分にとってのメリットや条件を複合的にバランスよく併せ持つ家選択へのシフトが起こっている。その中で、特に人とのつながりやコミュニティの比重が高まっている。しかし、コミュニティ・ニーズと近所づきあいの現状には乖離があるのが実情だ。

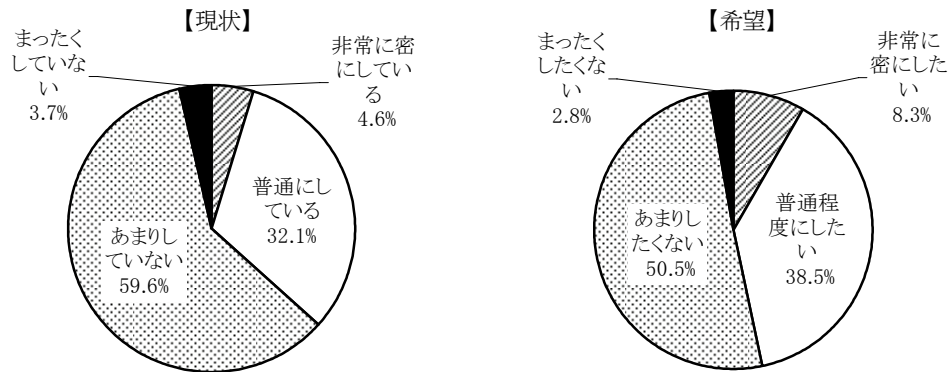
<コミュニティ・ニーズと近所づきあいの現状>

地域コミュニティの必要性・重要性に異を唱える人は多くないだろう。第一生命経済研究所の調査（ライフデザイン白書2006-07）でも、地域の安心・安全の実現において、「日頃からの近所づきあい」が必要だと考えている人は64.8%でトップとなっており、「警察のパトロールの強化」（54.3%）や「街路灯の設置や公園の見通しなどの整備」（49.0%）などを上回っている（図表省略）。

それでは、実際の近所づきあいはどの程度のものなのだろうか。ご近所づきあいの現状と希望、実体験などについて、株式会社ナノ・メディアの協力の下、109人にネット調査を実施した（図表1）。その結果、「非常に密にしている（互いの家に上がる・一緒に飲食をする）」とした人は4.6%、「普通に行き来がある（モノの授受や行き来がある）」とした人は32.1%となっており、6割近くが「あまりしていない（挨拶程度はする）」とし、普段のつきあいは挨拶程度にとどまっている人が多数派となっている。「まったくしていない（顔を知らない・話したことがない）」とした人は3.7%だった。

また、今後の希望としても、「非常に密にしたい」とする人は8.3%、「普通程度にしたい」とする人は38.5%で、現状よりも積極的なつきあいを希望する人は多いものの、依然として過半数は挨拶程度でよいと考えている。つまり、漠然と地域のコミュニティはあったほうがよいと感じつつも、実際の日々の近所づきあいは挨拶程度で、今後の希望も挨拶程度がよいと考えている人が多いのである。

図表1 近所づきあいの現状と希望



資料：株式会社ナノ・メディアと筆者の共同調査「ご近所づきあいについてのアンケート」（2010年1月）ネット上で109人に調査

<近所づきあいの利点・欠点>

近所づきあいの利点と欠点について、既出の株式会社ナノ・メディアとの共同調査結果から、まず利点として特徴的なものを以下に示す。

- ・ 子どもが突然具合が悪くなって救急車を呼んだときに上の娘をおばあちゃんがくる間見えてもらったことがあります(29歳女性、居住年数6年、アパート、現状の近所づきあい：普通／希望：普通)
- ・ 留守中に子どもが学校から帰ってきて、家で待たせてくれた(30歳女性、居住年数通算17年、戸建、現状の近所づきあい：普通／希望：普通)
- ・ 防犯に役立ちますね(32歳女性、居住年数通算28年、マンション、現状の近所づきあい：あまりしていない／希望：あまりしたくない)
- ・ いろいろな情報が入手できる。いろいろ料理などおすす分けできる(34歳女性、居住年数通算27年、戸建、現状の近所づきあい：非常に密／希望：非常に密)
- ・ 長期間留守にすると気軽に頼める(44歳女性、居住年数18年、戸建、現状の近所づきあい：非常に密／希望：非常に密)
- ・ 何かあったら遠くの親戚より近くのご近所さん(55歳女性、居住年数18年、戸建、現状の近所づきあい：非常に密／希望：非常に密)
- ・ 体調が悪いときに買い物を頼んだ(57歳女性、居住年数20年、戸建、現状の近所づきあい：普通／希望：あまりしたくない)

利点としては、大きく分類して日々のコミュニケーションそのものを楽しむケースと、家族や自分の体調不良時や外出時など、突発的な事態に対するちょっとしたサポートの2パターンがある。ただし、後者のサポート依頼は普段からのコミュニケーションがなければ難しいため、完全に区分することはできない。実際に調査でも、「急に家のカギを預けなければいけなくなったときなどに、もっと親しくしておけば気兼ねなく渡すことができたかなということがあった（44歳女性、戸建、居住年数4年、現状の近所づきあい：あまりしていない／希望：普通）」といった意見がみられる。

また、兵庫県在住者で「阪神淡路大震災の時に近所づきあいは大切だと思った」との意見もあった。地域のネットワークやサポートの必要性を体感したときに、近所づきあいの利点を実感するようである。実際に震災時の被災マンションの再建築において、既出のコーポラティブハウス形式をとったケースもみられる。

一方、欠点としては次のような意見があげられた。

- ・ 集合住宅で騒音の苦情が多いと聞き、近所づきあいをしていれば多少の騒音は我慢してもらえらると思っただが、近所づきあいが苦手なので結局もめた(30歳女性、居住年数3ヶ月、マンション、現状の近所づきあい:あまりしていない/希望あまりしたくない)
- ・ 私には子どもがいません。両隣は子どもがいるので話が合いません。子どもがいない人は、いる人から下に見られている気がします(38歳女性、居住年数12年、集合住宅、現状の近所づきあい:あまりしていない/希望:普通)
- ・ 噂話を流される(35歳女性、居住年数11年、戸建、現状の近所づきあい:普通/希望:普通)
- ・ 時々煩わしいと感じることもある。見張られているようで感じが悪い(45歳女性、居住年数17年、戸建、現状の近所づきあい:普通/希望:普通)
- ・ とても仲良くされていたご近所の方が些細なことで全く挨拶もされなくなったのを見ているので、ほど良い遠さの付き合いを心がけています(58歳女性、居住年数30年、戸建、現状の近所づきあい:普通/希望:あまりしたくない)

利点・欠点以外の意見として、「転勤などでいろいろ移り住んでいるが、ほとんどの場所で挨拶程度のつきあいしかしていません(39歳女性、マンション、現状の近所づきあい:あまりしていない/希望する近所づきあい:あまりしたくない)」というケースもみられた。また、子どもが近所づきあい開始の要因となっているケースも多く、子どものいない世帯ではペットを介在して地域に溶け込むというケースも聞かれるなど、つきあいのきっかけや共通の話題がないと地域に入りづらい様子がうかがえる。このように、近所づきあいをしていない人には、「近所づきあいをしたいができない」というケースも散在していることがわかる。

<近所づきあいのネックは距離感>

近所づきあいはいざというときには頼りになるが、トラブルのリスクやわずらわしさを伴うケースもあり、特に1日の大半を自宅やその周辺で過ごす人は慎重にならざるを得ない。一方、自宅外で過ごすことが多い人は、近所とのネットワークを強化する機会が乏しい。ライフスタイルの多様化が進む中で、近所づきあいの必要性は認められつつも、「近所づきあい」そのものの定義がなく、距離のとり方が人それぞれで物理的要件も異なることから、つきあいはますます困難となっている。

こうした中、地域の連絡手段としてメールやツイッターが活用されるケースが見られている。これらは「挨拶以上、立ち話以下」のつきあいに適したツールであり、双方の都合や形式を気にすることなく気軽に送受信ができ、さらに同報性があるので一度に複数の人と情報を共有することができるなど、いつでもどこでもしたいときにだけコミュニケーションができる。わざわざ出向いたり電話をするほどではない用件を伝えたり尋ねたりすることができ、距離感のギャップを感じにくい点が支持されている。ただし、いざというときに地域コミュニティを機能させるには、やはりベースとして互いが「顔の見える相手」として相手との関係を意識し、最低限の情報を把握していることが重要となる。

コミュニティはそれ自体を作ることが目的ではなく、機能させることに意義がある。コミュニティとは人と人がコミュニケーションでつながることによる副産物ともいえる。地域コミュニティにセーフティネットとしての機能を期待するのであれば、個人が安全網の内に守られるという感覚ではなく、自らが網そのものを形成する自覚を持ち、積極的につながろうとしなければならないのではないのか。